



新聞のレイ
アウトにはい
ふやわゆる禁
じ手も擬人法
を用いた表現
が単語として
定着するに
は表現の印象
強さ和使用頻
度がいくつ
か

存在する。それらは読者が新聞を読みやすくするために決められた伝統的なルールだ。しかし我々編集者にとっては面割り（紙面のレイアウトを考へること）における大きな壁である。そのことは禁じ手の名称からもうかがえる▼「腹切り」「泣き別れ」「しりもち」。

これら3つは新聞の禁じ手のなかでも、特にうっかりやってしまいがちなタブーである。それぞれ腹切りは段と段の間が紙面を一直線に通る現象のこと、泣き別れは記事が段をまたいだときに、段の変わり目から段落が始まってしまふこと。しりもちは2段以上の見出しや写真用最下段においてしまふことだ▼どれも擬人法が使われたものであり、ユーモアある言葉ばかりである。なぜこのよ

度の高さが重要であると考へる。最初に誰かがこぼした「文章が別れて泣いているぞ」というような言葉。それが印象に残り、さらに何度もその現象に悩まされたために、「泣き別れ」が名称として残ったのではないか。

歴代の新聞界隈の先輩方が苦しんできた様子が目に浮かぶ▼だが最近はこちららを禁じ手とする風潮も薄れてきている。近年は従来のルール以外にもデザインや写真などで読みやすくする方法が増えた。今では積極的に腹切りを行っている新聞社もあると聞く▼新聞の自身はもちろん、新聞自体も世間の動きに合わせて変わるものだ。陵水新聞も読者のニーズに合わせて、よりよい新聞にしていきたいと思う今日この頃である。

蒔

薊

滋賀県彦根市馬場1-1-1